

## 住民主体による地区活動発展のための課題

小田美紀子・松岡 文子・齋藤 茂子・山下 一也  
伊藤 智子・松本玄智江・長島 玲子・井上 千晶  
矢野 香\*・福間 紀子\*\*・片伊勢妙子\*\*\*

### 概 要

本研究は、A町B地区における住民主体による地区活動発展のための今後の課題を明らかにすることを目的とした。B地区福祉ネットワークメンバーを対象とし、地区活動の現状、今後の課題、関係機関の役割について、グループインタビューを行った。その結果、自主的な活動継続のために、自主財源確保、組織の柔軟な対応が必要、協力員確保のために、勧誘方法、活動内容・役割の検討が必要、利用者増加のために、楽しい会の実施、正確な情報提供、継続的な勧誘が必要、活動のマンネリ化解消・体制検討のために、利用者へアンケート調査が必要、協力員・ボランティアの心構えとして、リーダーシップ訓練等の研修が必要であることが課題として明らかになった。

キーワード：住民主体、地区活動、グループインタビュー

### I. はじめに

2006年の介護保険法改正では、介護保険の基本的な理念である自立支援、すなわちその人の生活・人生を尊重し、出来る限り自立した生活が送れるように支援することに立ち返り、この実現のため介護予防サービスの導入をすることとなった。この介護予防の具体的な体制として、虚弱である高齢者を対象とした地域支援事業がある(小坂, 2006)。

このような中で、2007年度、介護予防活動の効果的推進と事業の体系化をめざし、本学は、出雲市との共同事業としてA町B地区において、介護予防教室を実施した。B地区は、以前から地域住民で組織されているB地区福祉ネットワークのメンバーにより自主的な活動としてミニデイサービス事業の支援が実施されてお

り、現在も定着している。この共同事業の目的は、B地区の高齢者を対象に既存の地域にあるネットワークを活用した介護予防教室を試行・評価し介護予防プログラムの開発を行うこと、教室を試行しながら、地域のネットワークづくり、参加高齢者のニーズ把握、教室に関わる地区のスタッフ育成に重点をおいた活動を行い、最終的に地域住民を主体とした事業の展開ができることを目的とした。具体的には、行政スタッフ、本学スタッフ、B地区福祉ネットワークのメンバーが協働し、回想法を取り入れた介護予防教室を展開した。本学は、教室実施前に地区把握を実施し、地区の現状に合わせた事業の体制づくり、教室内容の計画・実施・評価に主体的に関わり、事業後半には、B地区福祉ネットワークのメンバーが中心となって活動できるように意図的な関わりを行った。

今後も、B地区において、共同事業をともに行った経験を活かし、より充実した地区活動がなされることが期待される。

そこで、本研究は、A町B地区福祉ネットワークメンバーを対象に、地区活動の現状、今後の課題、関係機関の役割についてグループインタ

\* 出雲市役所湖陵支所

\*\* 出雲市役所介護保険課

\*\*\* 出雲市社会福祉協議会湖陵支所

本研究は、本学平成20年度特別研究費の助成を受けて行った。

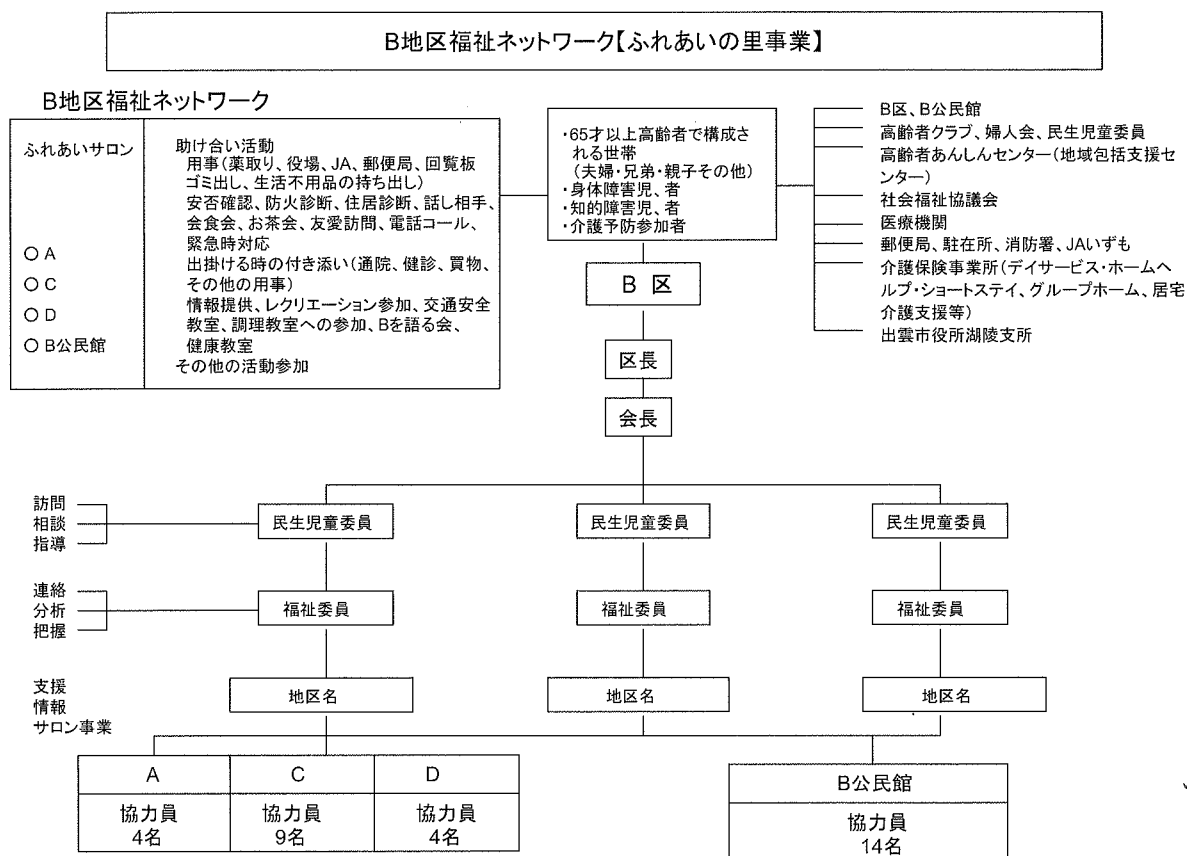


図1 B地区福祉ネットワーク【ふれあいの里事業】組織図

ビューを行うことにより、住民主体による地区活動発展のための今後の課題を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 地区福祉ネットワークを基盤としたふれあいの里事業の概要

A町B地区は、2008年8月現在、人口1,343人、世帯数532世帯である。B地区は、A町の中のモデル地区として、1997年に「地域福祉ネットワークふれあいの里」事業を開始した。B地区では、1999年にリーダー養成講座が実施され、ミニデイサービス事業を開始した。翌年2000年からA町がミニデイサービス実施要綱を作成し、社会福祉協議会に委託して全地区でミニデイサービス事業を開始した。現在は、A町全7地区15カ所で実施している。

ミニデイサービスは、高齢者の孤独死をきっかけに、住民の中で高齢者の見守りの必要性が提起されたことが発端となって始められたが、現在も後期高齢者の引きこもり予防、身体機能

低下予防、認知症予防、生きがいづくりを目的に行われている。現在、B地区福祉ネットワーク(ふれあいの里事業)の活動の一つとしてミニデイサービス事業が4会場それぞれ月2回ずつ行われている。ミニデイサービス事業に関わる協力員は、発足時はヘルパー養成講座受講者に限られていたが、現在は福祉に理解があり、ボランティア活動ができる人であれば自らの希望により随時会に申込み登録することによって協力員になることができる。B地区福祉ネットワーク(ふれあいの里事業)組織図を図1に示した。

### 2. 対象と方法

対象は、B地区福祉ネットワーク(ふれあいの里事業)に関わる協力員31名である。

2008年6月に、B地区福祉ネットワークの協力員が実施しているミニデイサービスの3会場において、ミニデイサービス終了後に各会場1回のグループインタビューを実施した。ミニデイサービスが4会場ある中で、3会場でのみ実施したのは、1回のグループインタビュー参加人数を6～8人で予定していたため、協力員

表1 グループインタビューの質問内容

質問内容	
1 地区活動の現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の地区活動支援において、みなさんはどのようなことをしていますか。</li> <li>・現在の地区活動支援の目標は何ですか。どのようなことを目指して支援を行っていますか。</li> <li>・自分たちの活動で継続して大切にしたいことはどんなことですか。</li> </ul>
2 今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域活動支援を今後も続けていこうと思った時に、直面している課題がありますか。</li> <li>・今の活動をさらに自主的な活動にするために何が必要だと思いますか。</li> <li>・活動を支援する人や参加する人を拡大するためには、何が必要だと思いますか。</li> </ul>
3 関係機関の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の地区活動支援において、関係する機関はどこがあり、それぞれにどのような役割がありますか。</li> <li>・支援者として、自分たちにはどのような役割が期待されていると思いますか。</li> <li>・活動を継続していく上で各関係機関に対し、どのような役割を期待していますか。</li> </ul>

表2 地区活動支援として実施していること

	人数 (人)	割合 (%)
ふれあいの里事業 (ミニデイサービス)	14	93.3
婦人会	6	40.0
食生活改善推進委員	2	13.3
区のお世話役	1	6.7
地域防災委員	1	6.7
老人会 (明晴会)	1	6.7
高齢者クラブ	1	6.7
子育てサロン	1	6.7
自治会役員	1	6.7
民生委員	1	6.7
福祉協力員	1	6.7
近隣の留守宅の巡回	1	6.7
見守り (夜の明かりの確認)	1	6.7
近隣の高齢者宅への声かけ訪問	1	6.7

注：複数回答にて延べ人数を記載

が少ない2会場を1会場でまとめて実施したためである。1回のインタビュー時間は、1時間～1時間半で実施した。方法は毎回同じにし、インタビューガイドに沿って、毎回同じインタビュアーが実施した。記録者と観察者は、毎回メンバーを変えて実施した。インタビューガイドに記した質問内容を表1に示した。

### 3. 記録と分析方法

記録は、グループメンバーの承諾の下にICレコーダにより録音をした。インタビュー内容について、非言語的なものも含めた逐語記録を起こした。

分析方法は、安梅のグループインタビュー法で行った。まず、インタビューガイドの質問内容に沿って、「重要な内容」「意味のある内容」を拾い出し、「アイテム」とした。その背景要因に留意しつつ、それを束ねて見出しを付け、「カテゴリー」に分類した(安梅, 2003,

2007)。分析は、信頼性、妥当性を高めるために2名の研究者の合議の上で行った。

### Ⅲ. 倫理的配慮

B地区福祉ネットワークの会長に事前に承諾を得た上で総会において、ネットワークメンバーに「研究へのご協力をお願い」の文書を配布し、①研究の目的と方法について説明、②録音についての了解、③匿名性と守秘義務を約束、④結果について、学会等で公表することについての了解、⑤意見集約後に報告会等によりフィードバックを行うこと、⑥研究協力は強制ではないこと、⑦質問等の問い合わせ先として研究代表者の連絡先の明示を行った。

グループインタビュー実施当日、開始前に再度説明をし、同意書署名にて同意を得た。

なお、本研究は島根県立大学短期大学部倫理

表3 関係機関とその役割

カテゴリー	アイテム
	ミニディサービス
・ B区や社会福祉協議会から補助金	・ 区の補助金
・ 社会福祉協議会や高齢者あんしん支援センターから人材派遣	・ 市が社協に委託して、社協から補助金をもらっている
・ 必要時関係機関から講師派遣	・ スタッフとして社協から1人来ている
	・ 社協、あんしん支援センターが関係している
	・ 町や消防、交番などは、必要な時に依頼すれば、講師等を派遣してくれる
	その他
・ B地区福祉ネットワークが全体調整	・ B地区福祉ネットワーク
・ 社会福祉協議会が研修開催	・ B区の区長と常任委員等で地区活動の役割分担をしている
	・ 社協で協力員の研修会（年2回位）

表4 地区活動支援で目指していること・目的

カテゴリー	アイテム
・ 地域のための活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ よそにいたので、違う風が入ったらよい</li> <li>・ みんなが一緒に生きていくことが出来る地域にする</li> <li>・ 高齢者が住みやすくなれば、小学生やみんなが住みやすい。ソフト面もハード面も</li> <li>・ 自分が住みやすい場所で居心地のいいところで生きていきたい</li> <li>・ お年寄りさんに対して、生活の向上になるように協力する</li> <li>・ ミニサロンは、楽しんで出してもらえるように努力している</li> </ul>
・ 自分自身のための活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の方と顔見知りになるし、おつき合いがふえる。自分自身のためでもある</li> <li>・ 友達がいっぱいできる</li> <li>・ 自分のために、自分の楽しみとして行っている</li> <li>・ 勉強させてもらいたいと思っている</li> </ul>

審査委員会の承認を得ている。

## IV. 結 果

第1会場は女性4名、第2会場は女性6名、男性1名、第3会場は女性4名、3会場合計15名(48.4%)のグループインタビューの参加があった。以下、グループインタビュー参加者は、参加者と表現する。

### 1. 参加者の地区活動支援内容(表2)

参加者が実施している地区活動は、ふれあいの里事業としてのミニディサービスが最も多く14名(93.3%)、次いで婦人会の活動、6名(40.0%)、食生活改善推進委員の活動、2名(13.3%)であった。その他の活動は各1名(6.7%)であった。

### 2. 地区活動の現状

1) 現在、地区活動支援において関係している

機関とその役割について、8つのアイテムが抽出され、5つのカテゴリーに分類された(表3)。以下アイテムは『』、カテゴリーは「」で示す。

関係機関とその役割から地区活動の現状をみると、B地区は福祉ネットワークという組織があり(図1)、地区活動の全体調整がなされていた。予算面は、B区や行政から助成金を得ていた。主な活動としてのミニディサービスは、社会福祉協議会や高齢者あんしん支援センターから運営のための技術支援があり、必要時に関係機関から講師派遣がされていた。また、ミニディサービス事業を支援している協力員は、社会福祉協議会が開催する研修を受講し、地区活動を支援する上で必要な知識・技術等を学んでいた。

2) 参加者が地区活動支援で目指していること・目的について、10のアイテムが抽出され、2つのカテゴリーに分類された(表4)。

表5 自分たちの活動で継続して大切にしたいこと

カテゴリー	アイテム
・地域の支え合いの強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いろんな会を通して、もう少しみんながうち解ける、支え合う 理由：地域内の親戚同士の減少 隣近所とのつきあいが希薄になっている</li> <li>・ 近所の安否確認、部屋の明かりを確認するなど自然に見守るといふ昔からの風習</li> <li>・ 向こう三軒両隣、遠い親戚より近くの他人、隣人愛、日頃のつきあいの大切さ</li> </ul>
・思いやりのある人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ お互い相手の気持ちを大事にして思いやりを持って、人間関係的なものを一番大事しないと続かない</li> <li>・ お世話をしているもの同士でも人間関係的なものを一番大事にしないと長続きしない</li> <li>・ ミニデイサービスのちらし配布による対象者への関わり</li> </ul>
・利用者への肯定的な関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者を肯定的に巻き込む</li> </ul>
・利用者への傾聴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 肯定的に受け止めてもらった後に聞くアドバイスは気持ちよく聞ける</li> <li>・ 高齢者は言いたいことがたくさんあると思うので、積極的によくよく黙って聞いてあげること</li> <li>・ あそこに行けば、話を聞いてもらえると思えること</li> <li>・ 聞き上手になること</li> <li>・ 話を聞いてあげたら、だんだん話しているうちに、この人なら話してもいいというような気持ちでお互に通じてくる</li> </ul>
・利用者との信頼関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 信頼関係</li> </ul>
・活動は楽しく	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一番のモットーは楽しく、行って良かったと思えること</li> <li>・ 得手不得手があるから、得意なことを分担して楽しく行う。必ずこうしないといけないということはない</li> <li>・ B地区福祉ネットワークという組織</li> </ul>
・自主的な関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何でもないことで、自分に今できることを探して行う</li> </ul>

参加者は、地区活動支援を行うことによって、「地域のための活動」として、高齢者の生活の向上を目指し、高齢者が住みやすくなれば、誰もがすみやすくなると考え、地域住民全員が一緒に生きていくことができる地域を目指して活動をしていた。一方、地区活動支援は、自分自身の勉強にもなる、友達もたくさんできて、自分自身が楽しむことができるという「自分自身のための活動」としても認識されていた。

### 3. 今後の課題

1) 自分たちの活動で継続して大切にしたいことについては、17のアイテムが抽出され、7つのカテゴリーに分類された(表5)。

B地区では、現在でも近隣との助け合いはあるが、以前に比べると、『地域内の親戚同士の減少』、『隣近所とのつきあいが希薄になっている』。そのため、参加者は、『いろいろな会をとおして、もう少しみんながうち解ける、支え合う』という関係が必要であると考え、「地域の

支え合いの強化」が継続して大切にしたいこととしてあがった。また、『お世話しているもの同士でも人間関係的なものを一番大事にしないと長続きしない』などの意見があり、会継続のために、「思いやりのある人間関係」が大切なこととしてあがった。利用者に対しては、「利用者への肯定的な関わり」、「利用者への傾聴」、「利用者との信頼関係」が継続して大切にしたいこととしてあがった。活動自体については、『一番のモットーは楽しく、行って良かったと思えること』を大切にしていた。また、参加者は、『何でもないことで、自分に今できることを探して行う』ことを大切に、実際に近所の留守宅の巡回を行うなど、「自主的な関わり」を実践し、今後も継続して大切にしたいこととしてあげられた。

2) 関係機関に対する期待については、10のアイテムが抽出され、5つのカテゴリーに分類された(表6)。

表6 関係機関に対する期待

カテゴリー	アイテム
・現状維持	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係機関とは連携をとりながら、今のままでおりでいける</li> <li>・区がきちんと行っているの、他のところに関わって欲しいというのではない</li> <li>・他機関が中に関わると難しくなる</li> <li>・関係機関には必要な時にその都度関わってもらうのが良い</li> <li>・現在あるB地区福祉ネットワークという、すごく良いのが出来ているので、このネットワークで充分である</li> </ul>
・介護予防教室の全町拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(共同事業として行った) 介護予防教室のようなものを全町あげてやっていくこと</li> <li>・社協がミニディサービスの手引きを作成してはどうか(すでにあるが有効活用されていない)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・財源の確保</li> <li>・行政は活動を広げる</li> <li>・大学は指導的立場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市町村合併後削減されているので、予算の確保が必要</li> <li>・活動を広げていくのは、行政</li> <li>・大学の方は、指導をする立場</li> </ul>

現状については、『区がきちんと行っているの、他のところに関わって欲しいというのではない』、『現在あるB地区福祉ネットワークという、すごく良いのが出来ているので、このネットワークで充分である』とし、『他機関が中に関わると難しくなる』、『関係機関には必要な時にその都度関わってもらうのが良い』と関係機関との関連については、「現状維持」で良いと考えられていた。その上で、関係機関に対する期待としては、『(共同事業として行った) 介護予防教室のようなものを全町あげてやっていくこと』とし、「介護予防教室の全町拡大」を期待していた。また『市町村合併後削減されているので、予算の確保が必要』とし、「財源の確保」を期待していた。具体的にあがった関係機関の役割は、「行政は活動を広げる」、「大学は指導的立場」の2つであった。

3) 支援者としての自分たちに期待されている役割については、期待されるミニディサービスにしたいと思っているが、自分たちに期待されていることについて聞いたことがないので分からないという意見であった。これに対し、アンケート調査を実施してはどうかという意見もあった。

4) 今後の課題については、17のアイテムが抽出され、8つのカテゴリーに分類された(表7)。「全然、出られない人とどう接していいのか」、「出ない人にいかにして誘ってあげたらいいのか」と「会に参加しない人への対応」が課題と

してあがった。また、『死亡や病気による減少』として「利用者の減少」も課題としてあがった。『ネットワークメンバーの後継者がいないというのが、これから先の一番の問題』として「協力員の減少」が課題としてあがっているが、これについては、『60才過ぎても勤める人が多い』、『基本的に該当者がいない』という意見があり、切実な課題としてあがっていた。上記「会に参加しない人への対応」、「利用者の減少」、「協力員の減少」に関する参加者の発言から続いて出てきたのが、このような状況があっても『今行っている自主的な活動を頑張って継続すること』であり、大きな課題として、「自主的な活動の継続」という課題があがった。「自主財源の確保」も会の継続運営のために必要な課題としてあがった。

実施している会の質に関する課題としては、「ミニディサービスのマンネリ化」があがった。

その他、B区の地区活動全体の課題として、『問題が生じた時に一人で抱え込まないで社会資源を上手に活用すること』、みんなが気持ちよく活動できるように「協力員・ボランティアの心構え」が課題としてあがった。

#### 4. 今後の課題への対策

今後の課題への対策としては、17のアイテムが抽出され、6つのカテゴリーに分類された(表8)。

会に参加しない人への対応として、『仲間(相棒)づくりとして、出ている人に誘ってもら

表7 今後の課題

カテゴリー	アイテム
・会に参加しない人への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全然出られない人とどう接していいか</li> <li>・出ない人にかかして誘ってあげたらいいのか (会に出ない理由) <ul style="list-style-type: none"> <li>・プライドが高い人は、他人にみじめな姿をみられたくないという部分がある</li> <li>・自尊心が強い</li> <li>・抵抗がある</li> <li>・人にもらって(昼食)食べるなんてという誤解がある</li> <li>・若い人が家におられる</li> <li>・家にお嫁さんが昼、帰ってくるため、何不自由なく暮らしている</li> <li>・自分は元気だからと一生懸命働かれる</li> <li>・まだ畑仕事ができる</li> <li>・家族が危ないからと出さない</li> <li>・耳が遠い</li> <li>・字が読めない</li> <li>・年齢差や状況の違いがある</li> <li>・痴呆の人だろうと耳が遠い人だろうとみんな一緒</li> <li>・状況が違っても協力員が一人一人についているわけにはいかない</li> </ul> </li> </ul>
・利用者の減少	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者が減ってきている (理由) <ul style="list-style-type: none"> <li>・死亡や病気により減少</li> <li>・新たな利用者がいない</li> <li>・世話する人が来なくなると行きにくくなる</li> </ul> </li> </ul>
・協力員の減少	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットワークメンバーの後継者がいないというのが、これから先一番の問題 (理由) <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動が自然細りになる</li> <li>・60歳以下の協力員が少ない</li> <li>・60歳過ぎても勤める人が多い。</li> <li>・基本的には該当する人がいない</li> <li>・退職された方に声をかけしても断られる</li> </ul> </li> </ul>
・自主的な活動の継続	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今行っている自主的な活動を頑張って継続すること</li> <li>・孤独死を防ぐためにも活動は大事</li> </ul>
・ミニデイサービスのマンネリ化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニデイサービスのマンネリ化</li> </ul>
・社会資源の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題が生じた時に一人で抱え込まないで社会資源を上手に活用すること、そのためのアドバイスをすること</li> </ul>
・自主財源の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国自体でボランティアにはばかりすぎらず、予算化すること</li> <li>・補助金がほしい</li> </ul>
・協力員・ボランティアの心構え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の負担が大きくならないように予算化が必要</li> <li>・都合が悪くて出られないとって、すぐにやめる</li> <li>・ボランティアだからドタキャンがある</li> <li>・ドタキャンがあると周りにも、その会が軽く見られる</li> <li>・急に休まれるとリーダーに負担がかかる</li> <li>・会議の時に私語が多い</li> <li>・会議の時に知らない内に話が決まっていることがある</li> </ul>

のが一番良い』という発言から「利用者による誘い」があがった。『無理強いして来ていただくという性質のものではない』、『孤独が好きで、静かに暮らして家におられるかもしれない』と強制はせず、そっとしておく方がよいという意見もあった。『理想は、初めは元気な時に、スタッ

フみたいな形で出てほしい』という発言から、「スタッフとして参加を促す」も対策としてあがった。利用者の減少については、『状況が違う(年齢差、耳が遠い、字が読めない、痴呆がある等)ので、その辺の配慮をしていかないといけない』ということから、「ミニデイサー

表8 課題への対策

カテゴリー	アイテム
・利用者による誘い	会に参加しない人への対応 <ul style="list-style-type: none"> <li>・出てもらうための声かけ（言い方）をどのようにするか</li> <li>・仲間（相棒）づくりとして、出ている人に誘ってもらうのが一番良い</li> <li>・無理強いして来ていただくという性質のものではないので、強制はしない</li> <li>・一人で孤独が好きで、静かに暮らして家におられるかもしれない</li> </ul>
・スタッフという形で参加を促す	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理想は、初めは元気な時に、スタッフみたいな形で出てきてほしい</li> <li>・1回出てもらい、楽しかったら、次も来ようと思ってもらえる</li> </ul>
・ミニデイサービスの体制検討	利用者の減少について <ul style="list-style-type: none"> <li>・状況が違う（年齢差、耳が遠い、字が読めない、痴呆がある等）ので、その辺の配慮をしていかないといけない</li> </ul>
・アンケートにて実態把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者への簡単な〇×式アンケート実施（要望、意見、協力員に対する意見や期待など）</li> <li>・アンケートを全体でしてまとめたら、おもしろい</li> </ul>
・ミニデイサービスの手引き作成	協力員の減少について <ul style="list-style-type: none"> <li>・わからない</li> <li>・後継者問題は長らく続いているが、解決の糸口は見つかっていない</li> </ul>
・相手の立場を考えた行動	ミニデイサービスのマンネリ化 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニデイサービスの手引き（地域版）好評だった取り組みをまたまたものを作成</li> </ul> 協力員やボランティアとしての心構え <ul style="list-style-type: none"> <li>・大人の分別を考えて、ぼか休みはしない</li> <li>・相手の立場（リーダー）を考えること</li> <li>・自分が立場を変えてしたらどうかということを考えてみる</li> <li>・会議の時には、私語は慎み、話は全体に確認をしながら進める</li> <li>・意見を言い合える関係づくりを心がける</li> </ul>

ビスの体制検討」があがった。また、『利用者へ簡単な〇×式アンケート実施』の意見もあり、「アンケートにて実態把握」があがった。ミニデイサービスの質に関する『ミニデイサービスのマンネリ化』については、「ミニデイサービスの手引き作成」という具体的な対策があがった。協力員やボランティアとしての心構えとしては、『自分が立場を変えてしたらどうかを考えてみる』などから、「相手の立場を考えた行動」があがった。

## V. 考 察

### 1. 地区活動支援の現状について

B地区は、B地区福祉ネットワークという組織があり、地区活動の全体調整がされていた。この福祉ネットワークは、10年の歴史があり、

ミニデイサービスを中心とした住民主体による地区活動を展開してきた。参加者が継続して大切にしたいこととして、このネットワークがあげられていた。また、関係機関に対する期待のカテゴリーとして「現状維持」があるが、その理由として、『福祉ネットワークというすごく良いのが出来ているので、このネットワークで充分である』という意見があり、参加者全員が自慢そうな表情でうなずき同感していた。B地区福祉ネットワークが自主的に運営しているミニデイサービスについて、『区がきちんと行っているの、他のところに関わって欲しいというのはない』、『他機関が中に関わると難しくなる』、『関係機関とは連携をとりながら、今までどおりでいける』という意見から、現状では関係機関と良い連携を築くことができていると考えられる。



本研究の参加者は、B地区福祉ネットワークのメンバーとして地区活動支援を行っているが、活動で継続して大切にしたいことの中に「自主的な関わり」があがったように、メンバーとしてではなく、個人的に自分で出来ることを探して、近隣の留守宅の巡回や見守り・声かけ活動を積極的に行っていた。また、地域内の親戚同士の減少や隣近所とのつきあいの希薄化など地域の現状をよく理解し、会をとおして地域の支え合いの強化を図り、継続して大切にしたいこととして、『向こう三軒両隣、遠い親戚より近くの他人、隣人愛、日頃のつきあいの大切さ』があげられていることから、一人一人が日頃からの近隣とのつきあいを大事にした活動をしていると考えられる。

## 2. 今後の課題と対策

高齢化に向けて孤独死を防ぐためにも「自主的な活動の継続」が課題とあがっていた。室らは、住民主体のまちづくり活動の課題として、「まちづくり活動の活性化、質的向上に加えて、その持続性が求められる。」とし、まちづくり活動持続の要因を評価・検証している。その結果、「活動自体を活発に継続し、母体となるまちづくり団体の組織の活性化や新陳代謝を図る上で有効なのは、多様なネットワークを構築していくこと、多様なネットワークは、財政基盤の獲得や、協力体制の確立など、まちづくり活動を持続するための基盤を安定させる。」と述べている(室, 2003)。B地区は、10年前から福祉ネットワーク組織が構築されており、関係機関との協力体制は確立されていると考えられる。財政基盤についても、現在は事業に対し、B区や行政から助成金が得られ、毎年安定した資金の確保は出来ていると考えられる。しかし、『市町村合併後削減されている』、『利用者の負担が大きくなるように予算化が必要』という意見があり、「自主財源の確保」が課題としてあがっている。今後は、積極的に自主財源確保に向けての取り組みを行う必要があると考えられる。

室らは、「長期にわたり活動する過程で、活動を取り巻く環境やメンバーの高齢化、住民の意識等が変化していく。持続性を保つためには、変化に対する柔軟な対応が求められる。他

の団体も直面した問題に対して組織改革や活動内容・頻度の調整等に対応することで、活動環境の変化や組織の停滞化を克服している。」と述べている(室, 2003)。現在、B区の福祉ネットワークはうまく機能していると考えられるが、今後も活動が継続していくためには、問題に直面した際に、組織の見直しをするなど柔軟に対応していく必要があると考えられる。

参加者が「自主的な活動の継続」をしていく上で一番心配していたのは、「協力員の減少」であった。B地区では、『60歳以下の協力員が少ない』、また『60歳過ぎても勤める人が多く、基本的に該当する人がいない』という実態があり、解決の糸口が見つからず、後継者問題は長年に渡って続いている。園部らの調査によると、「現在ボランティア活動をしていない理由の上位二つは、「仕事をしている」、「忙しい、時間がない」であり、これらは、退職後など時間ができたら活動してみたいと考えている可能性が考えられる。「機会がない、きっかけがない」という理由をあげる者については、機会が与えられれば現在ボランティア活動が可能であるという潜在的ボランティア活動希望者がいることを示唆している。潜在ボランティア活動希望者への働きかけが今後のボランティア希望者募集の手がかりになり、情報提供が必要である。」と述べている(園部, 2008)。

また、景山らは、B地区で行われているミニデイサービスのストレッサーとして、協力員の新規参入が少ないことをとりあげている。これに対し、「日頃から若い人たちとコミュニケーションをとり、こまめに声をかけて福祉協力員に勧誘する。福祉協力員同士の親睦を深めるためにミニデイ終了後に反省会を行った。その結果、福祉協力員でなくてもボランティアとして参加する人や、普段働いている人も土・日なら参加する人が出てきた。また、以前から福祉協力員となっている人も辞めずに続ける人は増えていった。」と述べている(景山, 2008)。B地区においてもボランティア活動をしたいが、「機会がない、きっかけがない」と考えている人はいると考えられる。今後は、幅広く、様々な方法で協力員の勧誘をしていくこと、また、次世代につなぐためにも働きながらでもできる活動

内容や役割を検討していく必要があると考えられる。

「利用者の減少」という課題については、『世話する人が来なくなると行きにくくなる』という意見があることから、ここでも協力員が辞めずに続けることが重要であると言える。活動で継続して大切にしたいこととして、『一番のモットーは楽しく、行って良かったと思えること』という意見があった。会自体をより楽しい会にすることは利用者の継続参加にとって重要であると考えられる。ミニディサービスの内容については、「マンネリ化」という課題があり、これに対して、「ミニディサービスの手引き作成」という対策があがっていた。また、現在は、痴呆がある人も耳が聞こえない人も、あらゆる人を一つのミニディサービスで対応する形となっており、これに対し、「ミニディサービスの体制検討」という対策があがっていた。今後は、ミニディサービスのマンネリ化解消や体制を検討し、より楽しい会にするために、利用者に対してアンケート調査を実施し、活動に対する要望・意見・協力員に対する意見や期待などを確認することが必要であると考えられる。

「会に参加しない人への対応」という課題については、『出ない人にどう接していいか、いかに誘ってあげたらいいか』という意見があった。武井らは、「介護予防事業に対する参加を促進するには、事業のねらいを正確に理解してもらうための講習会やイベントの開催、あるいは、人材養成を促進する、そしてまた様々な機会を通して積極的にPRしていくことが望まれる。」と述べている（武井，2006）。会に出ない理由として『人にもらって（昼食）食べるなんてという誤解がある』という意見があったことから、様々な形で会の目的など正確な情報を伝えていくことは重要であると考えられる。

伊藤らは、B地区のミニディサービスへの参加促進として、「ミニデイ参加高齢者への面接で、多くの高齢者が「〇〇さんに誘われて（行くようになった）」と答えていたことから、福祉協力員のミニデイへの誘いは、「ミニデイは自分が行く所ではない」という考え方（価値観）の固執を和らげ、参加のきっかけとなっていたと考えられる。」と述べ、参加促進の要因として、

福祉協力員の誘いをあげている（伊藤，2006）。今後も協力員による声かけを根気強く行うことは必要であると考えられる。その際に、相手の状況をよく判断し、元気な高齢者には、スタッフという形で参加を促すことが良い場合もあるし、状況によっては、無理強いせず静かな生活を尊重した方が良い場合もあり、相手の状況に合わせた対応が必要となる。これは、共に地域に住む協力員だからこそ判断できることであると考えられる。

「協力員・ボランティアの心構え」という課題は、B地区の活動全般に関する課題であった。

ミニディサービスだけでなく、婦人会等の活動においても、急に休むなどメンバーとして非常識な行動があり、それに対し、『相手の立場（リーダー）を考えること』、『自分が立場をかえてしたらどうかということを考えてみる』など、リーダーとして、メンバーとして「相手の立場を考えた行動」が対策としてあがった。今後は、リーダーやメンバーとしての意識改革が必要と考えられるが、天賀谷らは、「短絡的にメンバーの意識を変えようとするメンバーの反発に会うだけであり、リーダーシップ訓練や感受性訓練など意図的介入によって変化させていくことが必要である。」と述べている（天賀谷，2007）。今後、協力員に対する研修として、リーダーシップや感受性訓練を取り入れることは、地区活動を円滑に進めるためにも必要ではないかと考えられる。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、グループインタビューの発言内容のみから得たもので、参加者の背景としての情報は、現在、地区活動支援として実施していることのみであった（表2）。結果をより一般化するために参加者の年代、活動歴などより詳しい情報も得る必要があったと考える。また、分析においては、分析者の人数を増やしたり、スーパーバイザーによる指導、参加者による確認を行うなど、より信頼性・妥当性を高めるための配慮が必要であったと考える。

今後は、本研究の結果をB地区福祉ネットワークの協力員にフィードバックし、住民主体

による地区活動発展のための今後の課題解決のために、地区の実状に合わせた具体的な対策の検討を進めることが課題である。

## Ⅶ. 結 論

本研究で明らかになった住民主体による地区活動発展のための今後の課題は、以下のとおりである。

1. 自主的な活動を継続していくために、1) 積極的に自主財源確保に向けての取り組みをおこなうこと、2) 問題に直面した際には、組織の見直しをするなど柔軟に対応していくことが必要である。

2. 協力員確保のために、1) 幅広く様々な方法で勧誘すること、2) 仕事をしながらできる活動内容や役割を検討していく必要がある。

3. 利用者の増加のために、1) 会自体をより楽しい会にすることにより、利用者の継続参加を図る、2) 様々な形で会の目的など正確な情報を伝えること、3) 協力員からの継続的な誘いが必要である。

4. ミニディサービスのマンネリ化解消、体制検討のために、1) ミニディサービスの手引き作成、2) 利用者アンケートを実施し、会の内容、協力員に対する意見・要望を把握することが必要である。

5. 協力員・ボランティアの心構えとして相手の立場を考えた行動が出来るようになるために、リーダーシップ・感受性訓練を取り入れた研修を行う必要がある。

本研究を行うにあたり、ご理解とご協力をいただいたB地区福祉ネットワークのメンバーの方々に感謝いたします。

## 文 献

- 天賀谷隆, 遠藤俊美, 末安民生, 永井優子, 吉浜文洋 (2007): コンサルテーションリーダーシップ, 精神看護出版, 東京.
- 安梅勅江 (2003): ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ/活用事例編, 医歯薬出版株式会社, 東京.
- 安梅勅江 (2007): ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法, 医歯薬出版株式会社, 東京.
- 伊藤智子, 景山真理子, 森山美恵子, 佐々木順子 (2006): コミュニティを基盤としたミニディサービス事業にみる高齢者エンパワメントプロセスと促進要因の検討, 日本地域看護学会誌, 9 (1), 53-58.
- 景山真理子, 伊藤智子, 森山美恵子, 佐々木順子 (2008): 小地域でのミニディサービスにみる地域エンパワメント—コミュニティ・アズ・パートナーモデルを用いて—, 日本地域看護学会誌, 10 (2), 85-93.
- 小坂健 (2006): 介護保険制度と介護予防について, 東北大学歯学雑誌, 25, 1-6.
- 園部真美, 恵美須文枝, 高橋弘子, 鈴木享子, 谷口千絵, 水野千奈津, 岡田由希 (2008), 地域住民のボランティア活動に対する意識の実態, 日本保健科学学会誌, 10 (4), 233-240.
- 武井枝里奈, 仲野隆士, 丸山富雄 (2006): 介護予防事業への参加・不参加者の特性に関する研究—宮城県S町の事例を中心に—, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 1 (7), 17-25.
- 室靖大 (2003): 住民主体のまちづくり活動における持続性の評価に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 207-208.

小田美紀子・松岡 文子・齋藤 茂子・山下 一也・伊藤 智子・松本亥智江  
長島 玲子・井上 千晶・矢野 香・福間 紀子・片伊勢妙子

# Problems for Community Activity Development by the Dwellers

Mikiko ODA, Ayako MATSUOKA, Shigeko SAITO, Kazuya YAMASHITA  
Tomoko ITO, Ichie MATSUMOTO, Reiko NAGASHIMA, Chiaki INOUE  
Kaori YANO\*, Noriko FUKUMA\*\* and Taeko KATAISE\*\*\*

Key Words and Phrases : dwellers, community activity, group interview

---

\* Koryo Branch, Izumo City Office

\*\* Long-Term Care Insurance Section, Izumo City Office

\*\*\* Koryo Branch, Izumo Council of Social Welfare